

書評

岡本源太

『ジョルダーノ・ブルーノの哲学——生の多様性へ』

月曜社、2012 年

山内朋樹

「多様性」という言葉が喧伝されるようになって久しい。生物多様性を筆頭に、民族の多様性や宗教の多様性、文化の多様性などがいたるところで語られ、遺伝的多様性なるものまでもが囁かれている。こうした言葉が示しているように、人々は流れゆく世界のなかで喜びと苦悩をもって新たなものを迎え入れ、あるいはそれを巡って相対立し、ときに失うことで世界の多様性を日々目の当たりにしている。焚刑によって 1600 年にローマの広場で灰燼と化したジョルダーノ・ブルーノ（1548-1600）の時代もまた、こうした出会いに充ち満ちていた。十六世紀のヨーロッパは新世界の見知らぬ民族に邂逅し、奇妙な動物を絵画に描き留め、珍奇な植物を次々と持ち帰っては庭園や植物園に蒐集していた。それだけではない。宗派間の対立は相次ぐ抗争を招き、ヨーロッパ内部をも分割してしまっていた。近代の黎明にあって、時代の趨勢を理解し調停するはずの知も、この垣塙の前で戦慄していただろう。こうした背景のもとで「ブルーノが開いた「近代」とは、まさしくこの生の多様性の発見だった」（p.175）。

本書はイタリアを中心に活況を呈しはじめたブルーノ研究の新たな潮流を視野に収めながら、この流浪の碩学によって生み落とされた「生の多様性」の帰趨を跡づけた実り豊かな著作である。ドミニコ会を出奔し、諸国を渡り歩きながらその思索を紡いでいったブルーノは、フランセス・イエイツの甚大な影響も手伝ってか、魔術やヘルメス主義、記憶術などの秘教的な印象を色濃く纏っている。こうしたイメージが、ブルーノを伝統的な神学体系にも、近代哲学の明晰さにも定着しえない、どこかマイナーな暗がりへと追いやってもきただろう。しかしながら著者である岡本源太は、人間の感情（第一、二章）や無知（第三章）、共同体（第四章）や創造（第五、六章）などの伝統的な問題系を「生の多様性」という観点から読みなおすことで、この多様性を根底から支えている「生ける自然」の「流転」を鮮やかに浮かび上がらせてみせた。本書によって、読者はこの異端者の思索を「流転の哲学」という一貫した構図のなかに捉えることになる。

それでは、本書の構成を概観していこう。まず第一章では、人間の感情の多様性と、それを基礎とした「人間の尊厳」の新しいあり方が検討される。「人間の尊厳」の伝統は、諸存在のヒエラルキアを背景にして、人間を一方で動物から峻

別し、他方で神に結びつけることから成り立っていた。しかしブルーノはこの位階をなし崩しにしている。ブルーノの思索においては人間と動物、ひいてはあらゆる事物のあいだに実体の差異はなく、それらを魂や知性によって区別することはできない (p.24)。すべては唯一の無限な実体である「自然」が「諸々の個体において多様な様態であらわれている」にすぎないのだ (p.26)。だとすれば「諸々の個体」は何によって区別され、「人間の尊厳」はどこに求めることができるのだろうか。ブルーノはそうした差異を実体のうちにではなく、「活動」にもとづく相対的なものと捉えており (p.29-34)、とりわけ人間に固有の活動を紐帯の原理である「感情」の活動のなかに見ている (p.34-37)。一見、感情とは人間を拘束する不自由と受動性の証のようにも思える。しかしながら、感情がより多くのものにとらわれるということは、特定のものに縛られない「生の多様性」を証してもいるだろう。ここからブルーノは、感じやすく、感情が動かされやすいほど、「いっそう多様な条件や状況のもとで生きることができるようになる」という瞻目すべき帰結を導く (p.35)。ヒエラルキアが失われた宇宙のなかでブルーノが描きだす「人間の尊厳」とは、感情の多様な活動をとおして、その生の多様性の度合いによって動物と峻別されるのである。

続く第二章では、こうした感情の活動が最大限に発現している至高の生、「英雄的狂気」が議論の俎上にのせられ、感情の多様性が流転の相のもとで詳細に検討される。ブルーノにとって、人間の感情は相反するものからなる複合的なものであり、唯一の発端から生じながら「両極へとつねに同時に揺れ動いている」 (p.46)。たとえば、労苦は苦痛だが、疲れがとれてしまえば休息も退屈という名の苦痛でしかない。疲労の苦しみが続くあいだだけ休息の楽しみがあり、退屈という苦しみが持続するあいだだけ労苦は楽しみでもある。つまり楽しみと苦しみという相反した感情はつねに同時に存在し、一方から他方への移行、すなわち流転こそが楽しみをもたらすのだ (pp.47-48)。それゆえ、人間はつねに相反する感情を抱えて分裂し、葛藤している (p.49)。だとすれば、結局は流転するものごとに感情を繋ぎとめ、いたずらに葛藤に苛まれるのは空しいことだろう。しかしブルーノによれば、すべては流転するとしても流転それ自体は永遠なのであり、その限りで神的なものである。このとき流転する多様なものへと向けられる感情は「空しいどころか、まさに真摯で切実なものにほかならない」 (p.55)。感情はつねに葛藤と分裂に苛まれているにせよ、その「葛藤とひきかえにしてしか、あらゆるものの神性と善性は享受できない」のだ (p.57)。こうして人間の感情の多様性は、流転それ自体を神的なものと捉えることで最大限に評価されることになる。

感情をめぐる二つの章に続く第三章では、「知識が増せば痛みも増す」という『旧約聖書』の一節に着目し、知の空しさを説いたこの言葉を「無限の活動」へ

と読み替えていくブルーノの真意がはかられる。知識が増せば痛みも増すのは、自然が無限である以上、どれほど自然を探求して理解しようともつねに把握しえない部分が残る、その残りの部分への欲望が募るからだ (p.67)。ここでブルーノは、世界の無限性を前にして無為に陥る無知と、無限に探求し続ける無知、言い換えるなら「有限の活動」にもとづく無知と「無限の活動」にもとづく無知を峻別し、労苦とともにある後者を真理への経路として捉えなおす (p.76)。言われてみれば、有限の活動には発端と終局があるが、無限の自然を探求する活動には始点も終点も存在しない。そこには「無限の中心」を目指す無限の行程しか存在しないのである。しかしニコラウス・コペルニクスのコスモロジーの帰結を極限まで展開したブルーノにとって、宇宙の中心は遍在している。だとすれば、労苦を重ねる活動は、それが無限の活動である限りにおいて、つねに宇宙の中心に到達しており、それ自体ですでに完成しているだろう。無限の活動は、その無限性によって、自然の無限性に触れうるのである (p.80)。

こうして無限宇宙の唱道者は無為を退け、無限に続く労苦を選びとる。しかしながら、これまでの章で検討してきた感情論を共同体論へと架橋する第四章では、この労苦が悪の起源でもあることが示される。これまで労苦と対比されてきた無為は、まさに無為である以上、悪にも徳にもなりえない。そうであれば「人間は、悪に傾く危険を犯してでも無為から脱け出ることでは、善をなしえない」のである (p.89)。善悪は労苦から等しく生み出される。しかしながら熱いものが冷たくなり、また冷たいものが熱くなるように、相反する善悪の発端もひとつでしかなく、流転の相のもとでは一致するだろう。この「相反の一致」の教説によってブルーノは、善も悪も状況や視点次第で善悪どちらにでもなりうるものと見る。相対的なものとして捉えられた善悪は、絶対的な意味での善悪ではないからこそ、人々のあいだで折衝することができるし (p.100)、相反する人々を内部に抱えた、多様な社会的紐帯の編み方を構想することができるのである (p.106)。

ゼウクシスの逸話から説きおこされる第五章では、美の多様性が神の創造論との関係のなかで明らかにされる。ブルーノによれば、美は多様で個体の数だけあり「人間には人間の、猿には猿の、馬には馬の美があるという」(P.117)。そこには絶対的な美などなく、無数の秩序から生じる多数の美だけがある。ところで、この美の多様性は、伝統的に語られてきた全体に調和するかぎりでの多様性のことではない。むしろ「美は多様でしかありえず、多様であることこそが美なのである」(p.124)。著者によればこうした徹底的な多様性の評価には、ブルーノの神の創造の理解が深く関与しているという。ヒエラルキアを破棄した無限宇宙のなかで「細部がそれぞれの美を示すのは、全体との調和によってではありえず、むしろそれらがいずれも等しく無限の産出力のあらわれだからである」(p.133)。ブ

ルーノが描いた自然像のなかでは、多様性それ自体が美なのであり、芸術もまた、自然から選択的に模倣して調和的な美を創りだすゼウクシスの営みではないのである (pp.135-136)。

第六章で、自らの猟犬に喰い殺されるアクタイオン神話に付託して語りなおされるのは、ふたたび「英雄的狂気」の主題である。ペトラルカ主義の伝統において、アクタイオンを喰い殺す猟犬は、苦悶し、感情に翻弄される思考の寓意だった (p.144)。著者ととともにそうした伝統に属する詩の数々を味読することで分かってくるのは、彼らは決して振り向くことのない愛しの人を詩に詠い、その人を永遠の存在、つまり芸術作品へと高める新しい愛の形を創りだしたということである (p.153)。しかしながら、ブルーノが語る芸術とは、「創る者と見る者とのあいだに感情的な結びつき」を形成することであり (p.155)、この結びつきは自然の流転と同じく生成消滅するだろう。この意味でアクタイオンの死はこうした流転の形象そのもののなのであり、ペトラルカ主義のように愛しの人を詩作品として永遠化することはできないのである。ブルーノの語る「英雄的狂気」は、「感情のたえまない葛藤と変転を通して、たえず流転しゆく自然に寄り添い、その生を多様化しながら持続させゆく」ものとして位置づけられるのである (p.161)。

これまで評者は、ジョルダノ・ブルーノの哲学における「生の多様性」と、この多様性を可能にする「流転」という大きな主題に焦点を定めて本書を概観してきた。全体をとおしてみると、ブルーノが議論の核心部で折に触れて召還する「無限」や「相反の一致」などの語彙や、その類比的転用の妥当性については、論証の蝶番であるだけにいっそう詳細な検討を聴きたい思いが残る。しかしながら、この著作を読む愉しみはこうした主題だけで尽くせるものではないだろう。とりわけ評者にとって印象的だったのは、哲学研究と歴史研究とを見事に架橋してみせた本書のスタイルである。繙けばわかることだが、本書には哲学書としては異例なほどに多数の興味深い図版がその制作年代とともに掲載されており、文献表では原著の出版年が冒頭に掲げられてもいる。あくまで哲学書でありながらも、ときに古代神話やペトラルカ主義者たちの詩を傍証として織り交ぜながら、十六世紀後半の文化史的文脈——あるときはルネサンス哲学の伝統（第一章）、またあるときは図像の伝統（第二章）、さらには神学（第三、四章）や芸術論の伝統（第五、六章）——を織りあげていく著者の語りに沈潜することに、本書がもたらす尽きせぬ愉しみのひとつがあるかもしれない。こうして数ある伝統を歴史的に再構成しながらも、著者はブルーノのとるに足らない言葉やイメージのうちに伝統の変質を読みとり、注意しなければ読み飛ばしてしまうような細部から新たな着想をとりだしてみせる。だからといってそこに派手な演出などない。著者はこれらの細部を読み解くための文脈を淡々と紡いでみせるだけだ。その細部

はずっとそこにあった。しかしわたしたちは本書をとおして、なにも見ていないことに思い至るのである。